

2019 年度決算説明会における主要な質疑応答

質問	回答
<p>Q1 : 2019 年度業績は新型コロナウイルスによってどの程度押し下げられましたか。</p>	<p>A1 : 売上高は約 200 億円、営業利益は約 60 億円押し下げられました。それぞれ約半分をモータサイクル&エンジン事業が占めています。</p>
<p>Q2 : 2019 年度決算において繰延税金資産を取り崩していますが、新型コロナウイルスの影響ですか。</p>	<p>A2 : 2020 年度の見通しが大幅な減収・減益基調にあるため、2019 年度決算において繰延税金資産を取り崩すこととなりました。その結果、当期純利益は 2 月公表値の 250 億円から 186 億円に減少しました。</p>
<p>Q3 : 2020 年度において航空宇宙システム事業は、民間向け機体・ジェットエンジンそれぞれでどの程度減収となる可能性がありますか。</p>	<p>A3 : Boeing 社の生産計画からは約 30%程度の減収が予想されますが、詳細を検証しているところです。</p>
<p>Q4 : 2020 年度におけるモータサイクル&エンジン事業は、どの程度減収となる可能性がありますか。</p>	<p>A4 : 新型コロナウイルス感染症の終息時期が見通せないため、予想が非常に困難ではありますが、最悪の場合 3 割程度の減収となる可能性があると考えています。例年 4~6 月は欧米で年間の約半分の売上が立つ時期であり、落ち込み具合を懸念しています。</p>
<p>Q5 : 2020 年度における精密機械・ロボット事業の事業環境および売上の方向性について教えてください。</p>	<p>A5 : 油圧機器については、中国市場向けは 1~2 月は新型コロナウイルス感染拡大のピークでもあり前年同期比で減少しましたが、3 月以降は増加に転じており需要は回復しています。一方、欧米の先進国市場の先行きはまだ見通せていません。 ロボットについては、半導体関連投資を背景に半導体製造装置向けロボットは拡大が期待されますが、自動車向けをはじめとした一般産業向けロボットは投資の先行きが懸念されます。よって、精密機械・ロボット事業全体では減収を見込んでいます。</p>

2019 年度決算説明会における主要な質疑応答

質問	回答
<p>Q6 :</p> <p>財務体質が悪化していることから、もし 2020 年度が赤字になるとすれば資産売却以外にも更なる対策が必要になると思いますが、固定費抑制や債権回収の促進などについて定量的な目標はありますか。</p>	<p>A6 :</p> <p>2020 年度は新型コロナウイルスの影響により非常に厳しい財務状況になると見込んでおり、固定費の削減をはじめとした対策の検討に着手しています。</p> <p>その一環として、定量的な目標は検討中であるものの、設備投資や研究開発費、旅費交通費等の諸費用の削減および人員増の抑制を徹底します。また、入金条件の改善による代金の早期回収や仕入れの後ろ倒し、生産調整による売掛債権増加の回避や在庫圧縮についても徹底します。</p> <p>寮・社宅等の非事業資産の売却や外部資金の積極活用については既に実施しており、更に運転資金改善プログラムを立上げ、同業他社あるいは業界の優良な会社をベンチマークとして、当社の CCC（キャッシュ・コンバージョンサイクル）を要素別に分解して改善するよう取り組んでいます。</p>
<p>Q7 :</p> <p>2019 年度の期末配当が無配予定となりましたが、その考え方の背景を教えてください。</p>	<p>A7:</p> <p>3 月初旬までは少なくとも配当を実施する予定でしたが、新型コロナウイルスの影響により 3 月中旬から状況が急速に悪化しました。このような状況下において、2020 年度の業績が厳しくなることも想定され、十分な手元流動性を確保しておく必要性が生じたため、2019 年度期末配当は無配予定とさせていただきました。</p>

以上